

英語学習者の英語意識

—学生のレポートをもとにして—

梅原大輔

1 はじめに

本論は、外国語である英語と出会った日本人学習者が、学習の過程で、英語に対してどのような意識を持つのかを、英文学科の大学生のレポートを通してスケッチしようとするものである。この報告を通してわれわれは、外国語学習者は初期の段階から、無意識のうちに、母語である日本語の基準に照らして英語を理解しようとする傾向があること、母語である日本語とは異なる体系の外国語に出会ったときに、さまざまな形での合理的な理由づけを行って納得しようとする事、などを観察することができる。この結果は、学習者はその内面で未知の言語に対して様々な意識を持っており、それが外国語の習得に対して影響する可能性を示唆している。

ここで使用する資料は、甲南女子大学英文学科1年生の授業で3年間にわたって集めた約350件のレポートである。学生には、自分が英語と出会ったところ、あるいは英語を勉強してきた経験を思いだして、特に不思議に思ったこと、納得のできなかったこと、逆に感心したことなどを、自由に記述するように求めた。授業の中では、主に英語と日本語の違いを意識させるような話をし¹⁾、例えば英語では *brother* という一語で兄と弟の両方を指すことができるが、英語では兄と弟のような日常的概念を区別しないことを知って驚いたというようなことはなかったか、と例を挙げておいた。レポートには

1) 本学の英文科では、一年生に基礎講座という授業を必修で課し、全教員が毎週交代して、1時間ずつ専門分野について授業を行っている。

できるだけ具体的な例を挙げて説明するように、という注意を付け加えておいた。執筆の期間として1週間を与えた。

以下本論では、まず次節でこのような研究の方法について言語習得研究の立場から位置づけを行う。その後実際に集められた報告をできるだけ紹介しながら、3節では学習者が持ちやすい言語意識を特に意味の側面からまとめる。また4節では、英語の学習の過程でその意識がどのように変化する可能性があるのか、という点をまとめることにする。

2 方法論に関する議論

ここで最初に議論したいのは、上のような方法で集められた学習者自身による内省的な報告内容に、どの程度の信頼性があるのか、ということである。

ある学習者の持つ言語能力はその人の頭の中にあるもので、外部から直接観察することは不可能である。このような言語能力に対して、学習者本人の内省的な説明をデータとして利用することは、1950年代までの行動主義的な思潮の中では不可能なことであった。しかし、言語の認知的側面に関心が向けられるようになるにつれ、近年、このような方法論も認められつつあるようだ。

Nunan (1992) は言語学習の研究が採りうるさまざまなタイプの研究方法について解説しその長短をまとめている。彼が内省的手法(introspective methods)としてまとめているものの中には、実際の言語使用の時の意識の流れを言語使用者本人にリアルタイムで言語化してもらい、いわゆる think-aloud の手法、発話の内容をあとから本人に振り返ってもらい、その時の意識を言語化してもらい retrospection、学習の過程で気づくことを自由に記述してもらい diary studies などがある。今回われわれが利用するデータ収集の方法は、自由記述に頼るという点で diary studies の性格に最も近いと考えられる。

これらの内省的な報告を元にしたデータの最大の問題点は、その信頼性で

ある。学習者の外部からは観察できない意識を直接学習者の言葉を通して観察しようというこの手法は、当然のことながら、その報告の真偽について外部から確認する術も持たないのである。この問題は、*think-aloud* や *retrospection* のように特定の言語使用に際して内省を求めるタイプの研究だけでなく、*diary* を元にした研究についても見られる。*Diary* を元にした研究としてよく知られているものに Schmidt and Frota (1986) がある。これは、著者の一人 (Schmidt) が、ブラジルに5カ月間滞在してポルトガル語を学習する過程を記録した日記をもとにした研究であるが、次のように述べて、やはり内省的報告だけでは客観的な事実を捉えきれないとしている。

(1) Learners cannot say with assurance when their rules and outputs match those of native speakers, cannot be relied upon to identify their errors and areas of difficulty, and may not even be able to report accurately what they have said (still less, what was said by native speakers) on particular occasions. (Schmidt and Frota 1986: 238)

また先の Nunan も、*diary studies* について次のように述べている。

(2) Diary studies face problems and threats similar to other introspective data collection methods. In terms of external validity, critics of the method ask how conclusions based on data from a single subject can possibly be extrapolated to other language learners. Such critics would probably accept that diaries are ground-clearing or hypothesis-raising preliminaries to real research, but that they are not of themselves valid or reliable means of doing research. (Nunan 1992: 123)

しかしその上で、*diary* によって得られるようなデータを他の方法で得ることは難しいとして、Nunan は、“Even as a ground-clearing preliminary to psychometric research, diaries, logs, and journals have a valuable place in the overall methodological repertoire of the language researcher.” (p. 124) と書いている。本論ではこの立場に立って、内省的報告を利用することを正当化したいと思う。

実際には、今回利用するレポートと diary との間にも性格の違いがある。今回利用するレポートの内容の信頼性についても、ここで触れておくことにしよう。

Diary による研究の難しさは、言語研究の専門家でない書き手の場合、何について書けばいいのか、内容の有用性について認識が及ばないということにある。実際、diary を用いた内省的研究のほとんどは、言語研究の専門家自身が外国語を学ぶ過程を記録したものをもとにしているようだ²⁾。今回われわれが利用するレポートは専門家でない学習者によるものであり、しかも時間をおいた過去の経験を振り返って書いてもらったものである。厳密な意味での信頼性を望むことはできないが、それでも内容の事実性を確保するためのいくつかの基準を設定することはできるだろう。

一つは量的な問題である。レポートからわかることは、3年間にわたって300人以上を対象にしているにも関わらず、毎年驚くほど似通った報告が寄せられているということだ。例えば典型的に見られるのは次のような報告である。

(3) まず日本語と英語で違うなあと思うことは、日本語は一つの単語に一つの意味しかないけど、英語は一つの単語がいろんな意味を含むことが多いということです。“have”という単語にしても、「持つ」と「食べる」という全く違う意味を持つ場合が多々あることに驚きました。

(4) 私は英語を学んで感じることは、一つの単語がいくつもの全く異なる意味を持っているのが不思議です。…日本語には一つの言葉に一つの意味しか持っていない。中には二つ以上の意味を持つものもあるかもしれませんが、ほとんどありません。一つの言葉に一つの意味を持っています。

これらの書き手ははっきりと「日本語は一つの単語に一つの意味しかない」と現在時制で書いており、それ故、これはこの書き手が現在持っている意識として捉えてよいだろう。このようにはっきりと書いているものばかり

2) Nunan 1992, p. 121

ではないが、英語の多義語や類義語に対する疑問、不満(?)は報告の中に最も多く見られるものの一つである。そのような事実から見ると、これは日本人の英語学習者が英語に対して共通して持ちうる意識である、と考えることができる。その点で、毎年共通して現れるような報告の内容は、学習者の英語意識について、何らかの真実を映しているものと考えられる。

第二に、例えば次の例に見るように、現在時制で書いてある内容は、書き手の現在の言語意識を反映していると考えられるからである。

(5) 日本語では主語が単数であろうと複数であろうと「は」は「は」である。しかし、英語は主語によって am であつたり are であつたりと変化するのはなぜだろう？

(6) 英語では過去、現在、未来のことを話す時「～は」の意味である is が was や will be に変わるけど、日本語では時制に関係なく「は」は変わることがない。

(7) 一人称、二人称、三人称、これも日本人にはなじみのない表現だ。私は am で、あなたは are、彼・彼女は is。日本語では「私は」、 「あなたは」、 「彼・彼女は」の「は」一語ですまされているのに。

これらの書き手は、英語の be が主語や時制によって形を変えることに疑問を持っている旨を報告しているが、同時に前提として be が日本語の「は」に対応すると現在理解していることが現在時制の文章からうかがえる。これは意識的な理解であるため、これらの書き手が常に be を「は」(あるいは他の助詞)と結び付けて英語を書いたり話したりしているかどうかは分からない。従って、be に関する客観的なテストを課したとしても一貫して be を助詞と考えたような誤りをするかどうかはわからない。しかし自由記述による自発的な内省的報告によって、これらの書き手が、(おそらく誰にもそのように教わったことはないにも関わらず) be を「は」と結び付けて考えているということが分かるのであり、このことは書き手の英語能力に関する事実を(少なくとも部分的には)表していると考えていいだろう。

第三に、特に英語学習の初期の経験については、学習者の中に非常に強い印象を残している例がたくさんあることがわかる。これはレポートの中に極めて個別的、具体的なエピソード（しばしば失敗談）として紹介され、報告者自身が「今でもはっきりと覚えているが」というように書き添えている例も目立つ。

(8) 一番最初に戸惑ったのは発音だった。…友人から笑われたのは girl を「ギラル」と読んでしまったことだ。

(9) 例えば中学一年生の時、塾で使っていた問題集の和訳問題に Mr. Brown という名前が出てきたことがありました。私はそのとき、何の迷いもなく「茶さんは…」と答えを書きました。その後、採点してくれていた先生に「Brown さんは人の名前やからそのままいいねんよ。例えば青木さんという人がアメリカに行っても Aoki さんのままで Blue tree さんにはならないでしょ。それと同じこと」という説明をしてくれました。私はそのときの説明に、とても納得して、そのせいか今でも印象に残っています。

(10) 英語の綴りも、3文字くらいの簡単なものだとすぐに覚えることができたけれど、5文字以上になると読みにくし、覚えられないしで、よく苦労していました。一番最初のできた、その難しい単語というのは今でも覚えています。“interesting”。中学1年生の頃の私にとって、この単語ほど難しいものは他にありませんでした。

このようなものは、学習者の言語意識を反映すると言えるほどのものではないかもしれないが、事実性に関してはおおむね信頼してよいと考えている。

一方で、われわれのレポートが特有に持ついくつかの問題点にも触れておきたい。一つは、レポートの作成は授業後一週間の授業外での作業であり、その過程で、友達同士での相談などがあったかもしれない、ということだ。上で述べたことと矛盾するようだが、同じ年に同じような例文を挙げながら説明しているレポートについては、割り引いて考えなければならないだろう。

第二には、英語と日本語の違いから、典型的に思い付く文法上のトピック

ク、例えば語順の違いや、否定疑問文に対する受け答え、仮定法、無生物主語の構文、時制、冠詞などについての回答が多く見られることだ。あまり具体的なエピソードを伴わず、ある文法項目について意識的な難しさを述べただけの報告からは、報告者の言語意識を読み取ることは難しいように思える。

第三に海外での幼少の時から生活の中でほとんど無意識的に英語を習得した帰国生の場合には、このような意識的な報告は向いていないようである。これは仕方のないことであって、言い換えれば、本論でまとめているような言語意識は、クラスでのフォーマルな教授中心の日本の英語学習環境で特有に現れてくるようなものなのかもしれない。

また、当然のことだが、このような報告には、学習者が学習の過程で感じるものが全て現れてくるわけではない。この点では、中学生や高校生の持つ言語意識との比較ということも今後必要になってくるかも知れない。

以上のようなことを踏まえた上で、本節のまとめをしておきたい。本節では、学習者自身の内省的レポートをデータとして用いる。この研究は、具体的な言語使用や言語学習の際の認知プロセスを解明するためのものではなく、日本人の英語学習者が学習の過程で持ちうる英語観・言語観をスケッチするためのものである。ここで得られた知見は、より具体的な言語習得研究の下地になるものであり、更なる研究によって検証されるべきだと考える。

3 外国語への意識に対する母語の影響

3節では、具体的な報告の内容を紹介しながら、学習者の英語意識に対して、母語がどのように影響する可能性があるのかを見ていくことにする。同じような内容の報告もできるだけ数多く紹介したい。最初に英語を学び始める以前の英語観についても簡単に触れておくと、中心となるのは3.2.の意味に関わる部分である。

3. 1. 学習以前の言語観

日本人が英語と接するきっかけとなるのは、小学校で習うローマ字のアルファベットが多いようだ。当然考えられることだが、ローマ字と英語を混同してしまうことから、英語との出会いの段階で悩みを抱えるケースが見られる。このように、本格的に英語を習い始める以前に、学習者は既に独自の英語観を持っていることがあり、興味深い。小学生だからと言って外国語に対して無垢な気持ちで臨めるというわけではないのである。

(11) 私が英語というものに初めて出会ったのは中学一年生の時でした。ローマ字を小学生の頃に習っていた私は、英語とローマ字を同じもののように考えていて、ローマ字が好きで得意だった私は英語もこの調子でいけば楽にいけるだろうとたかをくくっていたのですが、中学一年の最初の英語の授業で、英語というのはローマ字とは全く違うことを知り、とてもショックを受けました。…私は「りんご」は apple ではなく ringo でよいのだと思っていたのです。いわゆる日本でもよく使われている「アップル」や「オレンジ」が英語読みであるとは思わず、「アップル」はアメリカ産のりんご、オレンジはアメリカ産のみかんを日本語でこう呼ぶのだと思っていました。

かなり個性的なものかもしれないが、次のように考えている例もある。

(12) 私が英語というものに興味を持ち始めたとき、今思えば変なことを聞いたなというおかしな疑問がありました。というのは、日本語が「あいうえお…」と五十音順にならんでいるから、英語の ABCD... の A=あで、B=い、C=う、というふうになっているのかと思い、母によく「うは B なの」という変な質問をして困らせたことがありました。

(13) 私は小学生の時まで、外国人はそれぞれの国の言葉を使ってはいるが、頭の中では日本語に訳して理解しているものだと思っていた。

ただこのような言語観は実際の英語を前にすると、それほど長続きするものではないようである。英語は日本語とは異なる言語である、という事実は、本格的に英語に触れるようになるのと自然と受け入れられるようだ。この段階に執着して英語の学習に差し障るような例は、少なくとも今回の報告の

中では見受けられなかった。

3. 2. 意味をめぐる混乱

2節でも例をあげたように、極めて多くの学習者が、母語と外国語の単語の間に完全な一対一対応があると考えており、日本語の単語を一つ一つ置き換えていけば、英語の文章ができるものと思っている。これはしばしば単語レベルだけでなく形態素のレベルにまで及んでおり、そのため次のようなことを考えるものもある。

(14) 夏みかん、私は summer orange と考えていた。が、辞書には a Chinese citron と出ていた。なぜ中国が関わるのか、最初に中国で作られたのか。色々な疑問がある。でも私が思うにこれは誤りではないかと。もう少し良さそうな表現がないかと探してみたいが難しい。

(15) 私がまず英語について不思議に思ったことの一つは、英語で豚のことを pig と言いますが、豚肉のことは pig meat ではなく、pork と言うことです。もっと合理的に作ってくれば単語を覚える私たちにとってはとてもありがたい事なのに、と思うのです。

このような考え方は報告の数こそ少ないが、入門期の学習者にかなり共通して見られるものではないかと想像できる。

そしてこの当然の流れとして、一つの英語の単語が複数の日本語に対応する、あるいは一つの日本語の単語が複数の英語表現によって訳しわけられると知ったとき、疑問や戸惑い、衝撃、怒りなどを感じることになる。この際、先にも述べたように、多義性や類義関係というものが日本語には見られないか、あるいはあっても例外的なものだ、と考える学習者がかなりいる。たくさんの同じような内容の報告例があるが、できるだけ挙げてみることにしよう。

(16) 英語という科目を学び始めたのは中学生からでした。初めて学ぶ言語に興味を沸き、私は自主的に勉強し、辞書を大いに利用しました。その時感じたことが「どうして一つの単語にこんなにたくさんの意味があるのだろうか」という

ことでした。

(17) 中学生の時、日本語では一つの言い方しかしないのに、英語ではいくつもの言い方ができるということを教わって悩んだことがあります。

(18) 英語の単語一つ一つには、たくさんの意味が含まれているものが多く、訳すときに何度も辞書を引き、どれがあてはまるのか?と苦労します。日本語の一単語に意味がいくつもあるものがほとんどないことから、英語とはだいぶ違っているなど感じました。

(19) 私が英語を学んできて不思議に思ったのは日本語にすると同じ意味になるのに英語は2つも3つもそれにあたる単語があるということです。...「見る」には watch, see, look などがあり、やはり場面場面によって使い分けなければなりません。watch と look などはほぼ同じように思えて、違いがいまだにあやふやのまま、ただ何となくといった感じで使ってきました。一体どうしてその場面によって単語を使い分けなければならないのでしょうか。

(20) 英語にはたくさんの意味があり、似たような言葉もたくさんある。日本語には「話す」という言葉は一つしかないのに英語にはその次にくるものによって使い分けなければならないのには少し戸惑う。

(21) 私がまず感心したことは、日本語では同じ呼び名を持つ二つのものでも英語では別々な二つの名前前でそれぞれ違った呼び名があるものがあるということです。

(22) そして英語では一つの単語でいろいろな意味を持つものがあります。例えば take は、取る、持ち去る、(写真を)撮る、買う、食べる、(授業を)受ける、連れていく...など日本語にはそれぞれの意味があるのに、英語にはその take という一つの単語だけで全ての意味になることが不思議だとおもいます。でもそこがまたあっけらかんとした欧米人らしい発想だと思います。

(23) それから疑問に思ったのは、「僕」でも「私」でも同じ I だということです。これは分けるべきだと思いました。それから一つの単語にたくさんの意味がありすぎだと思いました。それは文脈で判断しないとイケないけど、それがともむずかしくてどれも当てはまるような気がしてきて大変でした。

(24) しかし一方では日本語には単語一つに一つの意味しかないのに対し、英語は一つの単語で多くの意味を表すという性質がある。

(25) 最近不思議に思うことは、一つの単語に対していくつも意味があるということです。これは受験勉強で長文を読んでいるときに何度もこのことで引っ掛かりました。単語の使われ方で意味がいろいろ変わるといえるのは、日本語にはな

いことだと思いました。

(26) まず一つは、一つの単語に数えきれないほどの意味があるということだ。例えば、make や see という動詞は普通の意味で使われているなら訳すことは簡単であるが、make や see はそれぞれ知覚動詞として働くこともあり、意味が非常に変わりやすく訳しにくい。

(27) それから今でもよく分からなくてとても苦勞しているのが前置詞です。前置詞の種類はいくつかあるけれど、どれも同じような意味を持っていて、後ろに続くものによって使い分けなければなりません。私は前置詞を勉強している時に区別がつかなくて「意味をひとつずつ限定してくれたらどんなに楽だろう」と思ったことは数知れません。

(28) 次に分からないのは前置詞です。短い時間の時は at、曜日の時は on、月や年は in、お手上げ状態です。他にも in と into、場所の時の at, on, to など、これは例えばですが、場所は at、時間は on とはっきり決めたらなぜいけないのでしょうか。

(29) 「あなた」と「あなたがた」では明らかに単数と複数で違うにも関わらず、you という一つの同じ語句で表現されることが不思議です。…日本語は一つの語に一つの意味、あるいは似た意味しか含まないのに対して、英語はいろんな意味を一つの語に含みとても不思議に思います。

(30) そもそも英語の単語の中には何個もの意味が含まれている。例えば give という語には少なくとも「与える、渡す、預ける、認める、述べる、伝える、体力などを仕事に注ぐ」などたくさん意味をそなえている。

重要なのはこの問題がほとんど現在時制で書かれており、英語を習いはじめて少なくとも6年になる中級の学習者にとっても現在の問題として解決できないということだ。筆者はこれに関連して、英文学科3年生の英語学の授業で、上のような学習者の声を読ませた後、日本語で一つの単語が複数の意味を持つと思われる例を挙げてください、という簡単な調査をした。その結果、かなり多くの学生が、はし(橋, 端, 箸), あめ(雨, 飴), くも(蜘蛛, 雲), はな(花, 鼻)のような同音異義語の例を挙げた。上の報告で、日本語には一つの単語に複数の意味がある例はほとんどない、と指摘した学生も、このような同音異義語を念頭においている可能性がある。

文法項目に関しても日本語との違いに意識が向けられる。この時もやはり、日本語にうまく訳せるかどうか、という基準で、その項目の難しさが判断される場合が多いようだ。例えば、完了時制についての疑問を報告した例は多いのだが、進行形の使い方について日本語とのずれを指摘するような報告はほとんど見られない。進行形がとりあえずは「～している」という形に訳せてしまうのに対し、完了形と過去形は通常日本語で訳しわけられないからだと思われる。また筆者自身にも経験があるが、日本語に訳出できない語が英語の中にある必要性が理解できない、ということがある。例えば、*It is natural that he should get angry.* に見られる *should* のような例がそうである。いずれにしても日本語に対応するものは自然だが、対応しないものは不自然である、という無意識の前提から抜け出せない様子が見て取れる。

(31) 英語を習い始めてつらいと思ったことは、やはり不規則動詞の活用ではないでしょうか。現在、過去、過去分詞、未来形などに応じていろいろに助動詞や動詞を変えていかなければならない。私たち日本人は、語尾を変えるだけで簡単に時制を作れてしまう。日本語にはあいまいなところがあるなと思いました。

(32) 今まで文法の授業などをやっててややこしいなあと思ったのは時制のところです。...日本語で意味は簡単なのに英語でしかも文字にするとたちまちややこしくなるのがちょっとって感じです。

(33) まず思ったことは完了形の使い方です。なぜ *have* を使うのかもわからないし、その上日本語に訳してみても大した変りが見られないという点もなかなか納得がいきませんでした。なぜ大過去などという日本では全く表さないような時制まで表さなければならないのかとても疑問に思いました。

(34) また私が納得できないことに時制の一致があります。どうして時制をわざわざ一致させないといけないのか、どうしてそういうふうになったのか納得できません。

(35) それから時制の一致という文法もややこしかったです。現在はいいとして前の文が過去形の時は後ろの文も過去形になるというので英作など書くときや読む時は目で見て確かめられるけど、口頭では多分、前の文が何形であるかなんて覚えていないし何も考えずに好きなように *speaking* していたことでしょう。Yesterday まで *the day before* とか *the previous day* に変化するには滑稽に思えてなりませんでした。

(36) 英語を習い始めたころは形式主語と呼ばれる It がとても不思議でした。なぜ訳さないのにその単語を主語にするのかがよく分かりませんでした。

(37) 先生は「冠詞が一番難しい。慣れるしかない」と言っていました。こんなにややこしい冠詞は必要ないと思います。

(38) 私が面白いと思ったのは無生物主語で、日本語から考えれば絶対と言っているほどありえないからだ。...きっと外国人も無生物主語で話す人はいないと思うけど、もしいたら会ってみたいと思う。

(39) 辞書で調べてみると、a, an は one よりも漠然としていて、弱い意味を持ち、通例訳さないらしい。そうなると今度は初めからつけなければいいのではないかとさえ考えてしまう。...このように英語には納得できないようなことがいくつもある。なぜか不可解なことは初歩的なものにあるような気がするが、これは英語が作られたときあまり考えて作りだされたのではなく自然と話されるようになったからではないかと思う。

一対一対応的な分解的意味と実際に訳される意味とのずれは、慣用表現において最も衝撃的な形で学習者を襲っている。日本の高校の英語では、いかにも慣用句と考えられるものだけでなく、必要以上の句表現や構文に「イディオム」や「熟語」という名称が与えられ、その例外的性質を強調しているところがある。また口語的な表現に使われる慣用表現のリストなどを見ると、話し言葉の英語自体が慣用表現で埋めつくされているような印象も受けるようだ。それと同時に、イディオムや構文といった概念がやはり英語に特有のものである、と考えている様子もうかがえる。

(40) たとえば「雨が土砂降りに降る」が英語では It rains cats and dogs. まったくもって意味不明である。...それにしても「雨が土砂降りに降る」に猫と犬が出てくるのはおかしい。ふだん英語でしゃべっている外国人の人たちはこういう疑問を持ったことはないのだろうか。これもまた疑問である。

(41) 高校三年の夏休みが始まりだしたころ、私は大学受験勉強の中で、口語表現や、慣用表現の分野を勉強し始めて、今まで使っていた文法のルールが全くあてはまらないことに気が付き、大変ショックを受けました。特別な単語のつながりで特別な意味があり、なかなか覚えることができませんでした。

(42) go to bed は寝るという意味ですが、一番最初に「ベッドに行く」と誤っ

て訳してしまったせいか雰囲気的にはわかりますが、ベッドへいったからといってすぐに寝てしまうとは限らないのに、といまだに理屈っぽい考え方をしています。

(43)でもこういうふうになんていかに納得のいく語といかない語が私の中にはあります。Ladies and gentlemen がどうして「みなさん」になるのだろうか。直訳で考えるとなんとなくわかる気もするけど、なんとなくふにおちません

(44) 口語表現では、例えば Mind your own business!これは英語を見てみると business が入っているので仕事関係のことかな?と推測し、調べてみると「大きなお世話だ」という意味でした。かなりショックでした。どうして business が入っているのか、不思議で仕方ありませんでした。この謎は今も解明していません。私たち日本人は、一つの単語には一つの意味しかないのに、多義語を持つ英語を難しいと思うでしょう。

(45) また前置詞をつけると全く別の意味になる動詞も多い。私がかかっているものはほんのひとにぎりだと思うが、ある動詞とある前置詞を組み合わせた時にできる熟語の意味を英語を母国語とする人々はどれくらい知っているのだろうか。

(46) 疑問詞の使い方や訳には悩んだ。普通ならば when-いつ, where-どこ, who-だれ, what-何, how-どのように、という規則に従えば訳せる。がしかし、Why don't we go?を訳すときに why-なぜ, don't-～しない, we-私たち, go-行く、つまり「なぜ行かないのですか」と規則に当てはまらず「行きませんか」となる例外もある。

そういった中で特に印象深いのは、学習者が英語のことわざにとっても興味を持っているということである。ことわざというのは日本語の中でも非日常的な表現であり、言葉の文字通りの意味と実際に伝えられる意味とが異なっている。このように形式と意味のずれが認識しやすいことから、母語の表現から一步下がって、英語という別の言語の表現方法を評価できるのではないかとと思われる。中でも奇妙なほどの人気を獲得しているのは It is no use crying over spilt milk. ということわざである。動名詞を用いた重要構文としてしばしば引き合いに出される表現であるが、「覆水盆に返らず」という表現が日本語で日常頻繁に使われることわざとは思えないにも関わらず、この英

語表現に対する共感は毎年の報告の中で繰り返されている。

(46) 私はことわざというものは日本特有のものだと思っていた。でも英語にもあることを知ってとてもおどろいた。一番始めに知ったのは多分「覆水盆に返らず」だったと思うが、その表現の仕方に英語と日本語、または米人と日本人の違いがあると思う。

(47) 次にことわざについて。...“The early birds catch the worm.”=早起きは三文の得、で直訳とは少し異なるが、意味は同じに使われる。英語の方が具体的に、そのことわざの意味をストレートに表現している。“It's no use crying over spilt milk.”=覆水盆に返らずで、これも英語の方がストレートに表現している。ここが興味深いところで、感心する点である。

(48) そして英語にもことわざがあったということにもびっくりした。ことわざというのは日本独特の風習だと思っていた。

このような発見は英語に対する親近感につながる。英語と日本語が一对一には対応していないことを理解させるきっかけとして、ことわざは有効な素材になると思われる。

4 外国語理解への方策

学習者は、英語というものは日本語を単語のレベルできれいにおきかえればいい、というものではないことに気づいてくる。そして、母語とは異なるシステムを持つ言語に対して、さまざまな形で反応する。ここでは、学習の過程で生じた疑問や困難に、学習者がどのように対応しているのか、という点に注目していくことにする。

4.1. 覚える・そのまま受け入れる・そして覚えることへの疑問・反発

レポートを読んでいると、日本の英語学習者が中学から高校にかけてたどっていく典型的な勉強法が見えてくるようだ。中学校の最初の段階では、学習者は結構さまざまなことに疑問を感じて学校や塾の先生に素朴な疑問をぶ

つけている。ところが、高校生になると英語の学習法が急に変わり、大量のものをとにかくやみくもに暗記する、という方法にいやおうなく落ち込んでしまうように見える。

(49) 中学校に入学し、英語の授業が始まり、最初から英語が大好きになりました。...でも中学一年の時に担当の先生に、「英語は理屈ではない、『なぜ』『どうして』と聞かれても、こればかりはねえ...」と言われて、妙に納得した私はそれ以来英語のパターンを覚え込み、ひたすら英語を読んできました。

(50) それと単語の前に a や an や two など必ずつける習慣があるのに驚きました。母国語が英語の人はそんなに数にこだわるのかと思いました。じゃあどうして school には a をつけないんだろう。book と school はどう違うんだろう。日本語では一つの学校、一つの本、二つの学校、二つの本、と何も変わらないのに、どうして英語は違うのだろう、と思いました。当時の学校の先生に「どうして school は a がつかないんですか?」と尋ねても「とにかく school は a がつかないと覚えておきなさい!」と言われてしまい、しかたがなく無理やり覚えました。

(51) 私はいつも何気なく英語に接していた。高校の頃の英語は、ほんとうにほとんど暗記のみだったように思う。

(52) 例えば run では普通最も知られている意味で「走る」、そして「水などが流れる」、「うわさなどが伝わる」、「植物などが伸びる」。ここらへんまでなら、頭の中をフル回転させて、必死に考えたらなんとか出てくる答えかも知れない。けど「事業を経営する」、「車などを衝突させる」のあたりになるともうお手上げだ。これが run だけでなくほとんどの多くの単語で同じことがあり、そしてさらにたくさんの構文を覚えなくてはいけないからまさに英語は暗記の教科だと思う。

(53) そして受験の英語で覚えなければいけなかった基本的文法とイディオム、まずは基本的文法は text を見て解いてみるけれど答えを覚えるだけで、中の本当の意味を網羅することはできませんでした。

(54) そしてこの6年間で一番わからなくて苦しんで今もわかっていないものがあります。それは仮定法です。どうして未来のことを言っているのに will ではなくて would が出てくるのか。if 以降は過去なのに if より前は現在形であったりするのか。私は本当に分からなくて、公式のように覚えました。しかし、公式を覚えても英作文をしなさいという問題が出されると、結局は分からなくなってしまふのです。

面白いのは、この「暗記する」という方策に対して、それ以外に仕方なかった、と感じている学習者がある一方で、理屈によらずとにかく覚えてしまう、ということを積極的に評価する声があることだ。これは始めのころは疑問に思っていたことも、今となっては何であんなことを悩んでいたんだろう、という意識でもって振り返ることが多い。

(55) 私が中学校に入学して初めて英語を習ったとき一番疑問に感じたことは英語のスペルです。その当時私は小学校6年生でローマ字を習いマスターしたところだったので、なぜ「机」は“desuku”ではなくて“desk”なのかが理解できなかったのです。...このことを疑問に思った私はそのとき英語の先生に思い切っって質問しました。そして先生の返事は次のとおりでした。「なぜと言われてもそう書くからとしか答えようがない。」私はその返事を聞いて、そうか、わたしはそんなつまらない当たり前のことを尋ねたのかと思って、もういいやと思いつつ後は気にしないようになりました。そして不思議なことに、気にしないようになったときから私の英語の成績は一気に上がりました。「英語は暗記だけだ」とおっしゃった先生もいらっしゃいましたが、疑問も捨て、そのまま抵抗なく受け入れた結果かも知れません。

(56) 当時、英語でややこしいな、難しいなと思っても、しばらくするとそういうものなんだという風に受け入れてしまう。ただ、熟語、いわゆるイディオムを受験の時に必死になって覚えたのはすっかり忘れてしまっているような気がする。

(57) 中学の頃は動詞の変化や時制が私を苦しめていたし、高校では意味を考えずに丸暗記を要求された熟語の数々に悩まされた。しかし人間とは怖いもので、その時いくら不可解に思ったとしても、そう深く考えずに順応してしまった。例えば、熟語は今まで習ってきた文法をくつつがえすときがある。なんでこの動詞がこの形ののだろうかとか、この単語をどうしてこの意味で使うのだろうか、など、納得がいかないことがしばしばあった。けどそのたびに疑問点をふきとばして暗記に走っていた気がする。

(58) それと同時に違う単語でも意味が同じものもたくさんあるのに、この時はこっちの単語の方がいいとか言われても、私にとっては「どっちを使おうと意味は通じるんだから...」という状況でした。確かに今でもそう感じることは多いです。英語を母国語としている人たちはどうしてこんな使い分けをするのか不思議でたまりませんでした。先生に質問しても、「この時はこっちのほうが一般

的な」としか言ってくれないので、自分にも「この時はこの単語」というように丸覚えするしかありませんでした。

報告の中に英語の教師とのやり取りが出てくる例もたくさんあるが、そこでは教師は、理屈で納得させるよりも暗記を勧める役割で登場することがほとんどである。しかし中には、次のように丁寧なやりとりが書かれている例もある。学習者にとっては印象深く残っていることなのだろう。

(59) 私が初めて疑問を抱いた英語は前置詞だった。on を使うのか in なのかあるいは at なのか、少しひねった問題が出たらさっぱりわからなかった。不安になってその当時通っていた英語塾の先生に質問をしたところ、その先生は私に前置詞のテストをした。私はなんとなくで答えを書いた。答えは結構合っていた。そしてその先生がおっしゃるには、ずっと前にも私のように前置詞があいまいだと言って来た生徒がいた。先生は疑問に感じたことは何とか解決してあげたいと思って、一生懸命に説明したけれど中学一年生レベルの英語力では説明がつかず、難しいことを言い過ぎて、その生徒が英語嫌いになってしまいかえってよくなかったということだった。英語嫌いになることを一番いやがる先生だったので、前置詞に限らず英語という勉強は理論で理解するというよりも、むしろある程度皮膚感覚で理解するほうがよいと、そのうちわかるようになるとおっしゃった。

このように、とりあえず暗記するという方法は、日本人の英語学習の中で最も頻繁にとられている方策であるが、その結果、英語がよくわかるようになったというよりも、相変わらずわからない、という例の方が多いようだ。意識的、機械的な学習 (leaning) が外国語の習得 (acquisition) に移行するのか、という点については、何も言うべき資料を持たないが、筆者自身の経験では、やみくもに構文や単語を暗記するだけでは、習得には結びつかないように思える。それは何よりも、意味の一対一対応の前提を持ったままで、暗記をしていくため、学習者の知識の拡大ということにつながって行かないためだろう。

4. 2. 自分なりの理由付け・発見や驚き

本論で確認したいことの一つは、学習者は与えられた外国語を前にして、さまざまに思考し、その中で自分の納得のいくように理由付けをしたり合理化をしたりするということである。このような主体的な解釈は、Schmidt and Frota (1986) の diary の中にも見られるため、外国語の学習において自然なことであると考えられるが、場合によっては勝手な解釈による誤解につながり、その結果英語が分からないという意識を助長することにもなりかねない。よく見られる例として、複数名詞につく-s と現在時制につく-s との混同がある。同じ形式であれば同じ意味を持つはずだ、との認識から、次のような問題が生じる。

(60) それからさらに不可解に思ったことは三人称単数 *he* や *she* につく動詞に -s をつけるということである。私の頭の中のイメージでは、単数なんだから、一人の人が行う行動も一つなんだから動詞に -s をつけなくていいじゃないか、ということである。We や theyこそ複数人物なのだから、動詞に -s を付けるべきだなどと思っていた。自分の中でわけがわからない疑問でいっぱいだった。でも誰もそんなことを思っていないようだった。でも、そのうち私もだんだん規則を覚え、訳はわからないが *he* や *she* のあとの動詞には -s をつけるようになっていた。

(61) 私が英語を習い始めたころ、疑問に思ったことはたくさんある。例えば -s についてである。名詞が複数ならばその名詞に -s がつくると習った。一方で三人称単数 *he* や *she* の後の動詞にも -s がつくると習って疑問を感じた。-s がつくのは複数形だけではなくたのかと。 *he* や *she* は複数ではないのにどうして -s がつくのか、一人の行動なんだから動詞も原形でいいのではないかと、むしろ複数人物を表す *they* の動詞に -s をつけるのではないかと、疑問に思った。いろいろと考えたが、結局理由が分からず、いつの間にか当たり前のように使ってしまっている。この二つには何らかの関係があるのだろうか。

(62) そしてもっと不思議なのは三人称である。これはどうしてか彼や彼女という単語が来ただけで -s が動詞にくっつくのである。とするとこれは複数形とどのような関係なのだろう。私のつたない英語力ではこの二つは無関係のように思える。しかし双方とも -s が最後にくっつくというのは何らかの関係があるよ

うに思えて仕方がないのだ。

このような混乱の結果、複数主語の動詞に全て -s をつけてしまうという間違いが生じるかも知れない。試験の結果からは、現在時制の -s が理解できていない、ということになるのだろうが、学習者の中には上のような一貫した理由付けがなされている可能性がある。このような生じうる混乱については、指導者がよく把握した上で、前もって陥らないように注意を払うことができるのではないだろうか。

このような誤解に陥る危険はあるものの、英語の表現の意味を暗記によらずに理解しようとする意識はおおむね健全に機能している。同じ表現に対して、意味がさっぱりわからないと考える者がある一方で、日本語に一对一には直訳できない英語そのものの意味に気づく者がいる。この気づきは英語を日本語とは異なる発想と表現方法を持った言語として発見することになり、ある種「目からうろこが落ちる」経験になる可能性がある。その結果英語に対する興味が増すという積極的な意義を持っている。

(63) 高校の時、ワンピースというものが上下つながって一つの布からできていたからこう呼ぶというのがわかったときはかなり感動しました。

(64) ただ単語の量が無限にあり、それを覚えるのは大変だ。しかしその単語にも日本語の漢字のように語句を見れば意味が分かってくるものもたくさんあるのでそんなふうに単語を見るのは楽しい。例えば、table tennis、テーブルの上でテニスをする、なんとなく卓球というイメージがわく。watermelon、水のメロン、水分をたくさん含むメロンのような物、スイカかな？とにかくこうして一つ一つ単語の意味を考えていると面白いことにたくさんぶつかる。

(65) このように理屈を理解していないものはすぐに忘れやすいものだが、何回も繰り返し繰り返し覚えれば英語の概念というものが少しずつ身に付くだろうと思ひ、理解できないことは理解できないままにしておいて、覚えることを優先させて学んできたように思う。それでも英語の考え方が少し理解できたときはとてもうれしかった。その良い例が連語だ。例えば catch a cold は寒けをつかまえる、あつ、風邪を引くということなのだ、ということが分かったときは少しうれしかった。他にも病院へ行くということは英語では医者に会う、つまり see the

doctor という風に考えるんだなと分かったときもやはりうれしかった。

(66) しかし私はイデオムを覚えていくうちにあることに気づきました。例えば、turn down は「拒否する」という意味ですが、これを単に覚えるのではなく、こじつけて、まっすぐ行こうとしているのにじゃまされて曲がると覚えたり、いろいろと私なりに工夫して覚え、今まで納得ができなかったのがよくわかるようになりました。

(67) 大学受験の時にいろいろな単語や熟語を覚えていて、そのような日本語訳になる訳を自分なりに考えてみると大変覚えやすかった。例えば“May I help you?”です。これは「いらっしゃいませ」という訳ですが、入ってきた人に「お手伝いしましょうか」と店員が言っているから「いらっしゃいませ」という意味になるのだと無理やり考えて覚えました。

(68) 私にとって英語が面白いと思えるところは、英文を直訳したものから大体が想像できるものがあると言うことである。口語表現のところでそのような英文がたくさんあったことを覚えている。例えば The line is busy. という英文を直訳すると「線は今忙しいです」となり大体「電話中である」と想像できる。「覆水盆に返らず」ということわざは英語で It is no use crying over spilt milk. と書いてあった。この文を直訳すると「ミルクがこぼれたことで泣いても無駄だ」となる。言い換えると「済んだことはとり返しがつかないものだ」ということになり、「覆水盆に返らず」ということわざにあてはまる。このように、ことわざが英語で表すことができることができるなど思ってもいなかったのが驚いた。

(69) 英語に対して面白いなあと感じたことは例えば日本語での「雪が降りました」を英語では We had the snow. 直訳すれば「私は雪を持ちました」とすることなどです。確かにその文を違う角度から考えると「雪」を have という表現もできるなあ、と今は何の不思議もなく納得できますが、やはり初めのうちはよく解らないところもありました。

(70) ...他に私が苦労したことといえば熟語です。前の動詞は一緒なのに後ろの前置詞が違うだけで意味が違って来るのにはまいりました。前置詞はほとんど丸覚えの状態でした。でもそんな時、塾の先生に「前置詞自体にもきちんと意味がある」と言われて辞書を引いてみてからは以前よりもっと自然に熟語を覚えることができるようになりました。

学習のはじめから自然にこのような意識を持つことができるものなのか、学習の過程で次第にこういうことを発見できるようになるのか、ここでは何

とも言えないが、このような意味の理解の仕方が一度身に付けば、これを捨てて全面的に丸暗記に走るということは起こらないと想像できる。そういう意味で、上のような見方は、メタ言語的な認知のレベルへと一段階発展した言語意識の覚醒である、と考えられる。

4.3. 母国語（＝自分の持つ文化）の見直し・外国語の受け入れ

外国語の学習を通じて、学習者は自分の母国語がやっていることが唯一の方法ではないことを知る。そしてよりバランスのとれた言語観をもつことができるようになる。ただその過程では、外国語のやりかたに過剰に反応してしまうこともあるようだ。

(71) 英語の面白さは私にとって曖昧さだと思います。例えば *brother* という語には兄、弟という二つの意味があるけれど、英語ではそれらを文脈で判断しなければならぬという曖昧さがあることにもすごく興味があり、その微妙な違いを探るのが、英語の面白さだと思います。

(72) 私は日本語が英語に比べて具体性に欠けていると思います。…日本語ではバスでも自転車でも乗るは乗るですが、英語では電車やバスに乗る場合は *take, get on* を使い、自転車などにまたがって乗る場合は *ride* が用いられます。

(73) 逆に素晴らしいと思ったことは、英語は訳す人によっていろいろな取り方ができるということだ。それは日本語にも同じことがいえるかもしれないが、英語の方がより広いと思う。日本語を英語に直すときでも答えは一通りしかないというのは少ない。一人ひとりが個性を出すことができるといっても過言ではないだろう。

これらの例では英語はあいまいだったり、はっきりしていたりと正反対の側面に対して評価されている。もちろん日本語にも、その両面があるはずなのである。他にも、英語で主語の次に動詞が来ることに言及して、英語を話す人間は主張がはっきりしているから主語の次に動詞が来るのだ、と書いているレポートも毎年見られる。しかし世界の言語の多くは SVO 型か SOV 型のどちらかに分類されることからすれば、語順と国民性を単純に結び付け

ることはできないだろう。

日本語のやり方とは違う英語のやり方を理解する、という意識は、1年生の書いたレポート読んだ3年生にも見られた。英語には多義語や類義語が多く難しいという1年生に対し、3年生は次のような感想を書いている。

(74) ここで例にあげられていた「見る」「たぶん」など、日本語は多くの意味を持たない単語が多いようですが、それだけにその言葉を発する時の言い方や声のトーン、しぐさ、状況が大きく影響するんだと思います。...「見る」だとどのように見たのかがはっきりしない。しかしそこに日本の文化というか「あいまい性」が言葉にも表れているのではないかと考えられると思います。

(75) 英語の難しさはこのように似たような意味の単語がたくさんあることだと私も思います。...しかし多くの言葉があるということは自分の表現できる範囲が日本語よりも広がるので、微妙な気持ちまで言葉に表せるのではないのでしょうか。

(76) 私も最初はみんなと同じように、英語はなんでこんなに違った意味で一つの単語が多いのだろうと不思議に思ったり悩んだりしました。でも私たちの使っている日本語も、時と場所、目上・目下の人など、そのときによって使い分ける尊敬語、丁寧語、謙譲語などがあります。外国人がこれらの語を使い分けるのが難しいのと同様、日本人が英語の単語を使い分けるのが難しいのだと思いました。

これらの反応には、母国語を一步下がって見る目が感じられる。しかし、英語には多義語や類義語がたくさんありそれが英語の特徴だ、という前提の是非は問わずに、他の点で日本語にも複雑なところがあるのではないか、という捉え方をしていることがわかる。

これに対して、次の各例では更に客観的な視線が感じられる。

(77) 英語を使う人にとってはそれが当然であって、そんなふうに考えたことはまずないと思います。日本語だって、他国の人に対したら、とてもややこしい語学でしょう。敬語や関西弁などいろいろあるからです。とにかく母国語というのは自分が生まれたときからきいていた言葉なので、他の国の言語を学ぶとき、母国語を基準として考えるから難しくなるのだと思います。

(78) 英語は日本語のためにあるわけではないから物のとらえ方や概念は違うので幾通りもの訳し方があると思う。take や get とかはいろいろな意味に訳せるけど、大まかに言うと同じである。そういう根本の意味がイメージできたらいちいち訳さなくてもわかると思う。

(79) 私たち日本語を母国語としている人間はまず日本語が基本であって英語は外国語。...でも本当は言葉にはさまざまな意味があり、「見る」という日本語に look, see, watch などの表現があるのは当たり前という気が私はします。なかなかそういう風に思えないのは、私を含め、一つの英単語に一つ（あるいは二つ）の意味という英語教育を受けてきたからなのだろうかと思ったりもします。

(80) 私も英語を勉強していく中で、このようなことでよく悩みます。シソーラスを見ても、あまりにもたくさん単語があり過ぎて、どれを使ったらいいのがよく分からなくなります。また、和訳をするときにもどちらの意味を使ったらいいのかわかりません。でも、英語だけではなく、日本語でもちょっとしたニュアンスの違いで単語を言い換えたり、無意識のうちにしているように思います。

(81) 英語は確かに一つの単語に多くの意味があり、私たちにとっては使い分けが難しいのですが、一方で日本語は一つの漢字に多くの読みがあります。...私たちは日本語の難しいところを克服するには比較的早いので、その矛盾のようなことでもすぐに受け入れられるけれども、外国語になるとちょっとしたことでも大きなことに見えてしまいます。これは外国語を勉強するうえで、どの国の人も母国語以外の言語に対して思う共通のことなのではないかと思います。

(82) 私たちは英語を勉強しているので広く深く掘り下げてやっていますが、日本語は母国語だけに「何でも知っている」と思い込んでいるのではないかと考えさせられることがよくあります。私がいかに知らないだけで、日本語にも単語一つに意味がたくさんあるのかも知れませんね。

もちろんこのような視点を既に持った1年生もいる。やや優等生的な答えもあるが、以下は再び1年生のレポートからの引用である。

(83) このほかにもいろいろ不思議なこと、納得できなかったことがある。日本語と英語は必ずしも一致するとは限らないと思った。

(84) 発音以外で納得のいかない点はありません。なぜなら、英語も日本語も世界の多くの言語の中の一つであり、人間の言語はそれぞれがさまざまな文法の手段を使って物事を表現しているからです。英語という言語を無理に日本語に訳

そうとする行為自体がまちがいです。英語と日本語がそれぞれもつ素晴らしさをなくさないよう、英語を英語として理解できる域までたどりつきたいです。

(85) 留学するまで私が一番不思議に思っていたことは、英語には兄・弟や姉・妹の区別がないということです。この区別がなく、brother, sister だけだと、とても不便な気がしました。しかし留学後は、これは単に文化の違いであって私たちは何でも日本人中心に考えるから自分たちの文化と違ったことは「変」だと思うのだということに気が付きました。

(86) こういうことを考えるうちに、英語も日本語もそれぞれ違う言葉なのだから一緒にしないでそれぞればらばらで理解したほうがいいと思えるようになりました。

このように外国語と母国語に対して客観的な視点を持てるようになる過程は、異文化への適応過程一般と類似したものとして捉えることができるだろう。反発や過大な共感を経ながら、自文化と異文化をメタ的な目で捉えられるようになるという文化適応の過程が、異文化そのものである外国語への適応の過程と対応することは驚くに当たらないだろう。

5 最後 に

以上、3節4節で具体的にレポートに現れた英語学習者の英語観をまとめてみた。外国語と母語に対する見方が、主観的なものから、一レベル上のより客観的なものへと移行する過程のように並べてみたが、学習者の外国語観がそのように移行するものだ、というような主張はしていない。しかし、両者の間には関連があり、外国語観は一方向に発達するのではないか、特に初めて外国語を習うときには、外国語観を自然に発達させることが外国語能力の向上につながるのではないか、ということは仮説としてここに述べておきたい。今後本論の内容を出発点にして、言語観の発達と言語能力の発達との関連を検討していく必要があるだろう。もし両者に関連があるとするなら、自然な外国語観を発達させることを目的として教材の提示を工夫することも

できるようになるかもしれない。

これまで第二言語習得の研究では、学習者が頭の中でどのように意味を捉えているのか、どのように外国語の意味を獲得していくのか、ということについて、まだ十分な研究がなされていないように思う。しかし近年の認知意味論の発達によって、ネイティブスピーカーが持っている意味の構造については、多くの認知的な説明がなされるようになった。外国語学習者がネイティブスピーカーと同じ意味構造を獲得することが外国語学習の目標だとするのなら、第二言語習得の研究にも認知的な視点が必要になってくるのではないだろうか。そこでは、上で述べたような、母語との一対一対応の意味ではなく、メタファーなどによって拡張され、プロトタイプ的な構造を持つ意味³⁾の習得ということに、意識が向けられるはずである。

参考文献

- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press.
- McLaughlin, Barry. (1990) "“Conscious” versus “Unconscious” Learning". *TESOL Quarterly* 24-4. pp. 617-34.
- Nunan, David. (1992) *Research Methods in Language Learning*. Cambridge University Press.
- Schmidt, Richard W. and Sylvia N. Frota. (1986) "Developing Basic Conversational Ability in a Second Language: A Case Study of an Adult Learner of Portuguese", in Day, Richard R. (ed.) *Talking to Learn: Conversation in Second Language Acquisition*. Newbury House. pp. 237-326.

3) Lakoff (1987) 参照